

## 否定応答表現の分類に関する一考察

野口 芙美\*

### Classification of negative response expressions

NOGUCHI Fumi

#### Abstract

It is a common stereotype that the Japanese do not directly contradict others' utterances because negative acknowledgment requires a direct consideration of the conversational partner. Studies on negative response expressions usually examine negative response words. However, it has been reported that in cases where an interlocutor's utterance is directly denied, negative response expressions that do not use negative response words are used more often than those that use them. No studies on negative response expressions, including negative responses that do not use negative response word, have yet been successfully completed. Along these lines, in this paper, I reconsider the definition of a negative response expression and propose a classification of new negative response expressions, paying attention to the following two aspects. The first is to incorporate into the classification the aspect of a negative degree in relation to the preceding sentence. The second is to focus on the linguistic form of the negative response expression. The classification shown in this paper could be used as a framework for analysis to quantitatively analyze natural conversations.

Keywords : negative response words, negative response expression, negative degree, preceding sentence, language form of response expression

#### 1. はじめに

「日本人の返事はYesかNoかわかりにくい」「本当はどう思っているのかわからない」——日本語教師をしていると、そのような声を日本語学習者から聞くことがある。日本人の本音と建前は非母語話者を悩ませる日本文化の一つであるが、それは日本人がしばしば本当に言わんとすることをはっきりとした言語形式で表さないためであろう。特に、相手の発話に対して否定的な応答をする場合には、場面によって相応の配慮が必要となる。奥津(1989)が自然会話資料を用いた応答詞の使用実態の調査の結果、肯定応答詞が否定応答詞よりも圧倒的に多く用いられていたことから、日本人が「相手の発話に対して肯定的に回答するのが普通」(奥津1989:13)であり「会話の相手との関係をできるかぎり肯定的に友好的に保とうとしている」(同)と結論付けていることから、日本語における否定応答が相手との関係性に影響を及ぼす可能性が予測できる。

しかし、否定的な応答は否定応答詞の使用に限ったものではない。例えば、「これ、コーヒーですか」という質問に対し、「いえ」と応答詞だけで否定を表明することもできるが、「違います」と答えることもあれば、「麦茶です」と別の情報を与えることで否定することも可能なわけである。吉田(2012)は、真偽疑問文に対する否

---

キーワード：否定応答詞、否定応答表現、否定度、先行文、応答表現形式

\*平成27年度生 比較社会文化学専攻

定的な応答を応答詞の有無という観点から分析した結果、否定応答詞を用いない応答が6割近く現れたと報告している。つまり、否定応答詞の使用実態が否定応答表現の実態を表しているとは言い切れない。

これまで、否定応答表現を扱ったものは管見の限り吉田（2012）のみであるが、吉田（2012）もその対象は真偽疑問文に対する否定応答に限定されており、形式の分類も応答詞の有無に止まっている。しかし、否定応答は真偽疑問文に対する応答だけでなく、要求やコメント、謝罪や感謝などの儀礼的な発話に対しても現れうる。否定応答表現を概観するためには、真偽疑問文だけでなく、すべての否定応答表現を見ていく必要があるが、これまで否定応答表現の定義についてはほとんど議論されてこなかった。

そこで本稿では、まず否定応答表現の定義を明確にし、否定応答認定の基準を示す。その上で、否定の心理的負担という新たな観点を加え、先行文との関連及び否定応答形式の二つの面から、改めて分類を試みたい。

## 2. 否定応答詞の分類

先に述べた通り、否定応答表現研究は否定応答詞に焦点を当てたものが中心である。そこで、ここでは否定応答詞の分類がどのように行われてきたのかを概観し、その分類がそのまま否定応答表現の分類に応用可能であるかどうかを検討することにする。

否定応答詞の分類は、そう系コメントとの共起を見た土屋（1999）を除き、ほとんどが先行文との関連から行われている。代表的なものに、会話資料を用いて応答詞の使用実態をみた奥津（1988）、中島（2001）のほか、初級日本語教科書における否定応答詞をみた小早川（2006）がある。奥津（1988）は、肯定応答詞を含む全応答詞を16種類に分類し、否定応答詞はそのうちの12種類に該当している。奥津（1988）は疑問文、要求、コメントに対する否定を「論理的否定」、感謝、褒めなどに対する否定を「儀礼的否定」として大別している。中島（2001）も小分類は奥津（1988）とほぼ同様であるが、先行文が応答を要求するか否か、そして非否定表現の三つに大別しているのが特徴的である。一方、小早川（2006）は、先行文の有無、疑問文／非疑問文と形式のみで分類し、さらに機能を細かく見ている。三者の分類は大分類に違いは見られるものの、小分類はほとんど一致している<sup>1</sup>。これらをまとめると、否定応答詞はおおよそ「真偽疑問文に対する否定」、「付加疑問文に対する否定」、「要求に対する否定」、「コメントに対する否定」、「儀礼的発話（感謝、謝罪、褒め、謙遜など）に対する否定」、「疑問詞疑問文に対する否定」、そして先行文がないために感動、感嘆と名付けられることの多い「話題の冒頭に現れる否定」、最後に「自己発話否定」に分類することができると考えられる。

さて、この否定応答詞の分類をそのまま否定応答表現の分類に応用できるかを検討したい。否定応答詞の用法の中には研究者によっては非否定用法と捉えられているものも含まれている。否定性が議論される用法には、先行文を持たない会話の冒頭に現れるものや、肯定または否定の応答を求めない疑問詞疑問文に対して否定応答詞を使用するようなものがある。しかし、近年ではこれらも何らかの否定性を伴っていると考えられるものが多く見られる（小出2012、串田・林2015など）。そのため、これらの表現も否定応答表現の一部と捉え、否定応答詞のような明示的な形式を取らない場合を含め、どのように否定応答表現であると認定できるのか、その定義について次章で記述することにする。

## 3. 否定応答表現の定義

富樫（2006）は、「何かを否定するためには、それが話し手にとって否定的（不必要な）情報であると位置付けるための、相対的により必要（重要）な情報との比較を行わなければならない」（同：36）とし、それは「情報同士の「整合性」の計算である」（同：37）と述べている。さらに「整合性の計算により、不整合という結果が得られれば、提示された情報が否定される」（同：37）と述べ、このような計算処理を「否定」と捉えている。

富樫（2006）はさらに、否定応答の性格を「情報そのもの」の否定と「情報提示行為」の否定の二つに分けている。そして、「いえ」「いいえ」「いや」の三つの異なる否定応答詞は、どれも「情報そのもの」に対して不整合性の標示、つまり否定が可能であるが、「情報提示行為」に対して不整合性表示を用いることができるかどうかという点において異なると主張している。富樫（2006）が挙げている「情報そのもの」に対する不整合性の標

示の例は(1)のような例である。

(1) A このケーブルをつなぐんですか？

B いえ。／いいえ。／いや。

(富樫2006:23)

(1)では、「このケーブルをつなぐ」かどうかという情報(疑問)に対して「このケーブルはつながらない」という不整合性を標示していることになる。次に「情報提示行為」については、(2)のような例が挙げられている。

(2) (体調が悪そうなBを見て)

A どうしたの？ 顔色悪いよ。

B いえ／?? いいえ、何でもないです。

(富樫2006:34)

富樫(2006:34)はこれについて、「話し手Bが否定しているのは、話し手Aが提示した「顔色が悪い」という情報そのものではない。「顔色が悪いので心配だ」と声を掛けたAの行為を否定している」と説明している。そして、このような場合、「いえ」は許容されるが、「いいえ」は用いられにくい。つまり、富樫(2006)によれば、「いいえ」「いや」「いえ」はそれぞれ使用範囲が異なり、「いや」>「いえ」>「いいえ」の順で狭くなる。

例(2)のような疑問詞疑問文のあとに現れる否定応答詞について、沖(1993:65)は「何か否定されるものが応答者自身の中にある」とし、「ある質問に対する応答内容には、同じ談話のルールに従う話者どうしが共有する常識としての知識データベースから計算される予想範囲値があって、その予想範囲値に対して応答者は態度を表明することから応答がはじまる」と考察しており、その捉え方は富樫(2006)の「整合性計算」と近い。また、近年では申田・林(2015)が「抵抗」という表現を用いた記述を試みており、彼らの記述は、先行文が疑問詞疑問文である場合を超えて解釈が行える可能性のあるものである。

先行文を持たず、談話の冒頭に現れる否定応答詞については、先行研究でも否定用法ではないという捉え方と、何らかの否定性を伴っているという捉え方があり、研究者によって意見の分かれるところである。富樫(2006)は(3)のような例を挙げ、同じ状況で肯定の「うん」と否定の「いや」のいずれも用いることができるが、bにはじっくりと考えた上での判断的なニュアンスが強く感じられることから、判断に至るまでの計算の存在を標示していると説明している。これについては小出(2012)も、否定応答詞(いや)が用いられる条件として、ある事態について先行認識があり、それについて評価を下しているとしているほか、山根(2003a)も「いや」で切り出す発話の場合、「やはり文脈的に否定のニュアンスを含んでいるものが多いように思われる」と述べている。

(3) (おいしいものを食べて)

a. うん、うまい！

b. いやあ、うまい！

(富樫2006:37)

(3)のような例は、先行文がなく、対話相手に提示された情報ではない。対話相手に提示された情報ではない例としては他にも自己発話否定があるが、これについて沖(1993)は、先の疑問詞疑問文の後の用法と同様、「予想範囲値」という表現を用いて考察している。したがって本稿では、他者によって情報が提示されていない場合も、話者の知識データベースが存在し、それについて整合性計算が行われていると解釈する。つまり、このような用法も非否定用法とは捉えず、否定用法の一部として分析対象とすることにする。

最後に、謝罪、感謝、褒め、遠慮といった儀礼的な発話に対する否定応答である。これについては、奥津(1989)や中島(2001)では、形は否定であるが肯定的な意味合いを持つと述べられているが、それぞれの言語行為について詳細な研究も多く、一括りに解釈するのは難しい。例えば、(4)は「褒め」の例であるが、Bによる否定応答が肯定的な意味合いを持つとは考えにくい。

(4) A:すごいね。

B:いや、そんなことないよ。

田窪・金水(1997)では、次のように述べられている。

例えば、相手の発話に自分に対する賞賛が含まれている場合、肯定すると自己賛美にとられるし、はっきり否定すると相手の評価能力を軽んずることになる。このような場合、しばしば「いや」「いやあ」「いやいや」等の応答が用いられる。これは、「あいまいな否定」と言えるであろう。

(田窪・金水1997:266)

「あいまい」ではあっても「否定」という言葉が用いられていることから、本稿でも「情報そのものに対する

不整合」とみなすことができると考えることにする。

また、感謝については、中島（2001：91）が「「ありがとうございます」「お世話になりました」という自分の行為に対する相手の高い評価を、「いいえ」「いえいえ」と否定することで、それほどの評価に値する行為ではないという謙虚を表わす表現となっている」と述べている。つまり、感謝のような発話に対しては、情報そのものというより「情報提示行為に対する不整合」と解釈することができよう。

以上から、本稿における否定応答を次のように定義する。

否定応答表現：提示された情報あるいはそれによって参照される知識データベースとの整合性計算の結果、情報（そのもの）、あるいは情報提示行為に対して不整合となったことの標示。

#### 4. 否定応答表現の分類基準

応答表現を分類するには、大きく二つの分類基準があると考えられる。一つは、否定応答詞の分類のように先行文との関連から分類するもの、もう一つは応答表現そのものの形式に注目するものである。

1章で述べた通り、否定応答は相手への配慮を要する行為である。そして、否定応答の負担度に比例して相手への配慮の必要性も高まることが予測できる。否定応答の負担度はその内容、つまり先行文によって変わると考えられる。また、富樫（2006）は否定が二つの側面、つまり「情報そのものの否定」と「情報提示行為の否定」に分けられるとしている（3章参照）。否定応答詞のうち、どちらも使用でき、最も使用範囲が広い「いや」は、山根（2003b：143）では「否定の度合いが一番弱い」とされ、「情報そのものの否定」にのみ用いられ、最も使用範囲が狭い「いいえ」は「相手の発話をきっぱりと否定」し、完結性の高さが指摘されている。つまり、富樫（2006）の二つの側面は、否定度に大きく影響すると考えられる。

そこで、本稿は先行文との関連だけでなく、否定応答が何を「否定」しているかという否定の側面についても検討し、否定応答の負担度を分類の観点に加えた上で新たな分類を5章で提案したい。否定応答表現そのものの形式については、否定表現の形式分類を参考に、否定応答表現形式への応用について6章で検討する。

#### 5. 先行文の分類

否定応答詞の分類については2章で概観した通りであるが、沖（1993）は、奥津（1988）の分類を元に、先行文が肯定／否定を期待しているかどうかという観点で分類を整理している。沖（1993）の「肯定期待」分類では、「付加疑問文に対する否定」「コメントに対する応答」「要求に対する応答」が「+」、「真偽疑問文に対する応答」「疑問詞疑問文に対する応答」は「±」、「儀礼的否定」が「-」となっており、話題の冒頭に現れる否定や自己発話否定は分類の記載がない。同分類では、「+」が肯定期待、「-」が否定期待であると見てよいだろう。「±」は基本的にはどちらも期待していない中立的な場合を示していると考えられる。

先行文の肯定への期待が強くなればなるほど、否定応答の心理的負担も高くなると考えられる。そこで、本稿では、否定応答の負担度を、先行文が肯定応答を期待しているかどうかという沖（1993）の分類を参考に位置付けることにする。

まず、沖（1993）は「真偽疑問文に対する応答」と「疑問詞疑問文に対する応答」を「±」としているが、沖（1993：66）も「自然談話に於いて相手の応答を期待する場合は、肯定応答を期待するのが話し手の心理でありコミュニケーションの原則」と述べているように、この一見中立的に思える2種類の否定応答の心理的負担は、肯定応答に比べて高いと考えられる。奥津（1989：9）も真偽疑問文に対する応答について、「肯定的応答と否定的応答とが五分々にでてくるはず」であるにも関わらず、八十六対十四で肯定的応答がはるかに多かったため、「真偽が問われている命題について、質問者はある程度肯定的な答えを予想した形のYNQを作るのではないか」（同）と仮説を立てていることから裏付けられる。そのため、「真偽疑問文に対する応答」と「疑問詞疑問文に対する応答」を、負担度「あり」と位置付けたい。

次に、沖（1993）が肯定期待（+）とした先行文について検討することにする。ほぼ同内容の（5）～（7）を比べてみたい。

- (5) 明日来る? (真偽疑問文)  
 (6) 明日来るでしょう? (付加疑問文)  
 (7) 明日来てくれる? (要求)

三つとも「明日来るかどうか」についての疑問文であるが、(5)に比べて(6)や(7)のほうが否定するのに負担を感じるだろう。「ね」「だろう」「じゃない」が付与された(6)のような付加疑問文は、確認要求あるいは同意要求と捉えられるため、質問者はある程度肯定を予測あるいは期待していると考えられる。「要求」はさらに肯定応答が期待されるものである。単なる情報要求である(5)と比べると(6)や(7)のほうが否定応答の心理的負担は高くなる。そして、「コメント」は基本的には肯定/否定応答を相手に求めない行為であるため、あえて否定の立場を表明することは特に相手への配慮を要すると考えられる。したがって、本稿では沖(1993)が肯定期待「+」とした先行文を、負担度「高」とする。

一方、沖(1993)が肯定期待「-」とした「儀礼的発話に対する否定」は、反対に否定応答が期待されるものである。儀礼的発話に対する応答は、肯定応答詞がほとんど用いられていない(奥津1988、中島2001)ことから、慣例的であったとしても否定応答が求められるものだと捉えられる。つまり、否定応答の負担度は「低」とみる。

「談話の冒頭に現れる否定」と「自己発話否定」は、沖(1993)での記載はないが、先行文が相手の発話ではないという点で負担度は「なし」とする。

以上、否定応答詞の先行研究の分類をもとに、否定の対象、否定の負担度という新たな観点を加え、先行文との関連からの分類を整理すると表1の通りになる。次章では、否定応答表現そのものに焦点を当てた分類について検討する。

表1 先行文との関連と否定行為の負担度からみた本稿の否定応答の分類

大分類	小分類	否定の対象	否定応答の負担度
真偽疑問文に対する否定	真偽疑問文に対する否定	情報	あり
	付加疑問文に対する否定		高
	要求に対する否定		高
コメントに対する否定			高
儀礼的発話に対する否定	感謝に対する否定	情報提示行為	低
	謝罪に対する否定		低
	褒めに対する否定	情報及び情報提示行為	低
	遠慮・謙遜に対する否定		低
その他	疑問詞疑問文に対する否定	情報提示行為	あり
	談話の冒頭に現れる否定	情報	なし
	自己発話否定		なし

## 6. 否定応答表現形式

否定応答表現形式を整理する前に、6.1で否定形式について先行研究をまとめる。その上で、6.2では否定応答表現の形式について検討したい。さらに分類項目の検討にあたり、否定でもしばしば問題となる焦点の問題についても言及する。

### 6.1 否定形式

否定形式には、工藤(2000)によると、大きく「文法的否定形式」と「語彙的否定形式」がある。以下に挙げる(8)は文法的否定形式、(9)は語彙的否定形式の例である。

- (8) 彼女は幸せではない。  
 (9) 彼女は不幸せだ。

(工藤2000)

(8)と(9)はいずれも「彼女は幸せだ」という肯定文を否定している。しかし、文法的否定は、「肯定とは矛盾関係にあって、主語と述語とのむすびつきを否定する文否定」(同：95)であるのに対し、語彙的否定は「単一概念を否定する語否定」(同：95)であり、「主語と述語の結合自体は<肯定的>」(同：95)である。つまり、両者は否定のあり方が基本的に異なっている。

否定形式には、否定形式自体の形式だけでなく、否定と呼応する形式についても触れておく必要がある。工藤(2000)では、否定と呼応する表現として、「けっして」「ぜんぜん」などの陳述副詞と、「一度も」「半年と」のように助詞を伴うものや、「誰一人」「しか」などのように数量・程度表現を伴うことで否定と呼応するものを挙げている。工藤(2000)によると、文法的否定形式は「決して」や「ちっとも」などの陳述副詞とともに用いられるが、語彙的否定形式は陳述副詞とは基本的に呼応しない<sup>2</sup>。そして、これら否定と呼応する形式は、用いられる語によって「完全否定」となることも「不完全否定」となることもある。工藤(2000：106-107)では、「半年ともたない」などを「示された数値と0(無)との間を表す<～以下>の意味になって、不完全否定」とし、「つゆほども」などを「小量以下」、「一つも」などは「<1以下>、つまり0<無>を表して、完全否定になる」と説明している。陳述副詞についても、「けっして」「ちっとも」などが「完全否定」で、「かならずしも」「あまり」などは「不完全否定」というように具体例とともに示されている。

## 6.2 否定応答表現形式の分類

否定応答表現は、ある前提(先行文)に対して不整合(矛盾)を示すことができれば、その形式は否定応答表現形式として認定が可能である。ただし、提示された情報が否定文であれば、その否定文が不整合であることを示す応答が否定応答となるため、形式上は肯定文となる。しかしここでは便宜上、先行文が肯定文である場合に例を限定して考察を進めることにする。6.1で概観した形式について、まずは疑問文とともに否定応答の場合を順に検討し、それ以外の否定応答表現形式の可能性について議論したい。

### 6.2.1 否定の意味を持つ否定応答表現形式

6.1で示した(8)の文法的否定形式も(9)の語彙的否定形式も、「彼女は幸せか?」という疑問文に対する否定応答表現形式として応用が可能である。最も短く簡潔な否定応答表現は、(10)のような否定応答詞を用いた否定応答であるが、「いいえ」は応答詞であるため、それだけを取り出しても前提(先行文)がなければ意味を持たない。そのため、否定形式というより、否定応答表現形式の一つであると考えるのが妥当である。

- (10) A：幸せですか?  
B：いいえ。

また、工藤(2000)が挙げている否定と呼応する陳述副詞と、程度・数量に係る形式は、基本的には文法的否定形式が後続して成り立つものである(例11、12)。

- (11) 彼女はちっとも幸せではない。  
(12) 全部は読まなかった。

しかし、否定応答であれば、後続部分、つまり、文法的否定形式が仮になかったとしても否定であることが認定可能で、(13)(14)のようにそれのみで機能する。

- (13) A：幸せですか?  
B：ちっとも。  
(14) A：全部読みましたか。  
B：全部は。

### 6.2.2 否定の意味を持たない否定応答表現形式

工藤(2000：104)には、「述語否定=文否定であれば、主語が表す実体(属性の持ち主)に述語が表す属性が存在するか否かをめぐって、肯定文とは矛盾関係(contradictory terms)になるが、述語否定でなければ反対関係(contrary terms)であってよい」とある。つまり、語彙的否定形式の場合には、反対語によって肯定文を否定し得るということになる。工藤(同)は「よくない=わるい」というかたちで反対関係になるのは特別なケー

ス」と述べているが、本稿では否定応答の形式としてこの「反義語」を独立した項目として立てることを提案したい。反義語を語彙の否定形式に含めないのは、例えば「暑い」に対して「寒い」は反義語ではあるが、個別で取り出された場合には否定の意味を持たないためである。宮地（1952）が述べているように「白」を否定し排除する「非白」の概念は「白」に依存しているが、「寒い」は「暑い」に依存していないことも根拠の一つである。

さらに、否定応答では、(15)のように問題となる既出の語彙以外の語彙の提示により、その語彙あるいは文を否定する場合は考えられる。

(15) A：試験は明日ですか？

B：明後日です。

語彙として見れば、「明後日」は「明日」の反義語ではないし、もちろんそれ自体で否定の意味を持たない。冨樫（2006）に従えば、「(試験は) 明日かどうか」という疑問文が提出されて初めて不整合計算がなされ、不整合であるときみなされた結果の発話と言える。そのため、このような例も否定を認定する上で必要な分類に加える必要がある。

### 6.3 否定の対象と会話の焦点

否定を扱う上で、「述語否定＝文否定」のような単純な構造の文である場合は良いが、そうでない複雑な文の場合に問題となるのが否定の対象、つまり焦点の問題である。久野（1983）は談話の文法には「省略順序の制約」があるとし、次のように説明している。

省略順序の制約（修正）：省略は、重要度の低いインフォメーションを表わす要素から、重要度の、より高いインフォメーションを表わす要素へと、順に行なう。即ち、より重要なインフォメーションを表わす要素を省略して、重要度のより低いインフォメーションを表わす要素を残すことはできない。  
(久野1983：120)

久野（1983：124）は(16)のような例について、話者Aが、問題の本をBが読んだか読まなかったにだけ興味があり、他の本のことは全く念頭にないものと仮定した場合、質問Aの焦点は「読みました」だとしている。aは「この焦点、即ち、最も重要度の高い要素のみを残した、一番普通の解答」である。一方、bは省略可能な要素で文の焦点になっていない「その本を」が省略されていないために不適格としている。そしてcが解答として適格であるのは、「その本は」が文の焦点になっているからであり、「Bの意識的、或いは半意識的意図は、問題の本は読まなかったが、他の本は読んだ、ということを示唆する処にある」と述べている。久野（1983）はこれについて、「問題の本について、Bがどのような行為を行なったか」でスタートした会話が、「どの本を読んだか、読まなかったか」という会話にシフトしてしまった」と分析し、このような会話の焦点シフトのテクニックが、「日本語で極めてひんぱんに現われる」と述べている。

(16) A：君は、この本を読みましたか。

B：a. 読みませんでした。

b. \*その本を読みませんでした。

c. その本は、読みませんでした。

(久野1983)

この会話の焦点シフトによって、aは完全否定の体であるのに対し、cは同じくAの疑問に対しては否定であるにも関わらず、部分否定、つまり不完全否定の様相となっている。それは、対象が問題の本1冊から、あたかも複数のうちの一部は読んだが一部（問題の本）は読まなかったと対象が広がったように感じられるためだろう。このシフトによって、aよりもcの方が否定度を低めることが可能ということになる。

会話の焦点のシフトは、疑問文に対する否定だけでなく、儀礼的発話に対する否定でも用いられる。例えば、「褒め」の先行研究では、その返答を「肯定」、「回避」、「否定」に分けているものが多いが、金（2012）では「否定」に分けたもののうち、不賛成や不同意以外には「意図への疑い」「自分に不利な情報を述べる」などを挙げている。これらも会話の焦点のシフトとして説明できるものである。

以上をまとめて表にすると、否定応答の分類は表2ようになる。分類には、まず形式面から、否定の意味をもっているものとそうでないものに分け、さらに表現形式の違いによって下位項目に分類した。分類の定義は、主に工藤（2000）を参照した。

表2 否定応答表現形式の分類

否定の意味	分類名	定義	例
あり	a. 否定応答詞	「いや」「いえ」「いいえ」「ううん」とその変化形 <sup>3</sup> の使用	A: 幸せですか。 B: いいえ。
	b. 文法的否定形式	肯定形式と文法的に対立するもの。主語と述語の結びつきを否定するもので陳述副詞と呼応する。	A: 幸せですか。 B: 幸せじゃありません。
	c. 語彙的否定形式	主語と述語との結びつきを否定するものではない語否定。陳述副詞とは基本的に呼応しない。	A: 幸せですか。 B: 不幸せです。
	d. 否定と呼応する形式	陳述副詞（けっして、ぜんぜん、あまり等）、数量や程度に関わるもの（一つも、なにも等）、～しか	A: 幸せですか。 B: ちっとも。
なし	e. 反義語	先行文の語の反対の意味を持つ語を提示するもの	A: 暑いですか。 B: 寒いです。
	f. 別の意味を持つ語	先行文の語とは別の意味を持つ語を提示するもの	A: 試験は明日ですか。 B: 明後日です。
	g. 会話の焦点シフト	会話の焦点をシフトすることで、結果的に否定を行うもの	A: 試験は明日ですか。 B: 試験はありません。

## 7. まとめ

本稿では、先行文との関連、否定応答表現形式の二つの側面から否定応答表現の分類を行った。先行文の分類には、相手への配慮という観点から、新たに否定行為の負担度も分類項目に追加した。否定応答表現形式は、否定形式の枠組みを応用し、さらに否定応答として応答可能となるものについて具体例を挙げながら検討した。また「会話の焦点シフト」という観点を取り入れることにより、固定された形式を持たない表現についても説明を可能にした。先行文によって用いられる応答表現形式は異なるのか、相手との関係性は応答表現形式の違いにどのように影響するのか、本稿の分類を枠組みとして、会話資料を用いた量的及び質的な分析によって研究をさらに発展させることが今後の課題である。

## 【註】

1. あるものには現れ、あるものには現れない項目があるが、分析対象が異なることに起因していると考えられる。
2. 例えば、「彼女は決して不幸せだ」とは言えない。
3. 変化形とは「いやー」「いやあ」「や」「いえー」など長音が挿入されたものなどを指す。

## 【参考文献】

- 沖久雄（1993）「肯定応答詞と否定応答詞の体系」『日本語学』Vol.12, No.4, pp.58-67, 明治書院
- 奥津敬一郎（1988）「「はい」と「いいえ」の機能」井上和子編『日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究』研究報告4, pp.133-182
- 奥津敬一郎（1989）「応答詞「はい」と「いいえ」の機能」『日本語学』Vol.8, No.8, pp.4-14, 明治書院
- 金庚芬（2012）『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』ひつじ書房
- 工藤真由美（2000）「2 否定の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子著『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店
- 串田秀也・林誠（2015）「WH質問への抵抗 感動詞「いや」の相互行為上の働き」友定賢治編『感動詞の言語学』, pp.169-211, ひつじ書房
- 久野暉（1983）『新日本文法研究』大修館書店
- 小出慶一（2012）「「いや」の否定性と談話での機能」『埼玉大学紀要（教養学部）』47(2), pp.145-156, 埼玉大学教養学部
- 小早川麻衣子（2006）「初級日本語教科書に現れた応答詞—「いいえ」系応答詞の提示にみる問題点—」, 『日本語教育』130, pp.110-119, 日本語教育学会
- 田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会編『文法と音声』, pp.257-279, くろしお出版



- 土屋菜穂子 (1999) 「感動詞の分類 —対話コーパスを資料として—」『青山学院大学文学部紀要』41, pp.239-255
- 富樫純一 (2006) 「否定応答表現「いえ」「いいえ」「いや」 矢澤真人・橋本修編『現代日本語文法 現象と理論のインタラクション』, pp.23-46, ひつじ書房
- 中島悦子 (2001) 「自然談話における応答詞の使い分け —「はい」と「うん」、「いいえ」と「ううん」—」『国士舘短期大学紀要』26, pp.75-99, 国士舘短期大学人文学会
- 宮地裕 (1952) 「否定表現の一考察」『西京大學學術報告. 人文 = The scientific reports of Saikyo University. Humanistic science』2, pp.44-57
- 山根智恵 (2003a) 「談話における「いや」の用法」『岡大国文論稿』31, pp.136-145, 岡山大学文学部言語国語国文学会
- 山根智恵 (2003b) 「談話における「いいえ」「いえ」「いや」の使い分け」『2003年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.158-163
- 吉田吏沙 (2012) 「真偽疑問文に対する否定応答の分類 —「いいえ」の有無と話し手の意図を基準として—」『国文目白』51, pp.1-13, 日本女子大学国語国文学会

